

# 13 都市デザイン史 都市の個性をつくる

## 1 都市デザインチームの誕生(1971)

横浜市の都市デザイン行政は1971年、都市デザインチームの誕生から始まる。1963年の飛鳥田市政誕生と、その後の田村明氏入庁を契機につくられた企画調整室(のちに企画調整局)が強力に推進した、横浜を自立的都市として構築するための3つの基本戦略「プロジェクト」「コントロール」そして「都市デザイン手法の導入」。3つの基本戦略の1つに数えられているとはいえず、都市デザインチームはわずか2人、それも2人とも嘱託職員というスタートであった。元々アーバンデザインチームと呼ばれていたが、市会から「アーバンデザインでは意味が分からない」と指摘があり、「デザイン」については田村氏も譲らず「都市デザインチーム」となった、というエピソードが氏の著書「田村明の闘い」に記述されている。都市デザインという考え方や、役所の対極にいるデザイナーのよう



後列右端が国吉氏、前列左から田村氏、岩崎氏、北沢氏

な人たちを新しい血として、組織や議論を活性化する意図があった。その都市デザインチームのリーダーは岩崎駿介氏。東京芸大建築科を卒業後、大学教員としてガーナに渡り、ハーバード大学で都市デザインを学んだ後にボストン市役所で実務を経験、飛鳥田市政に共感し、田村氏を訪ねたという。もう1人はその後40年に渡り都市デザイン行政に一貫性を持たせる軸となった国吉直行氏。早稲田大学在学中に横浜をテーマとしたコンペの開催をきっかけに田村氏と出会い、卒業後直接門戸を叩いた。田村氏の記述から、横浜の都市デザインの重要な特徴となっているひと癖、ふた癖ある人たちの参入

も戦略のうちにあったことが伺える。横浜・都市デザインの仕事に関する記述は数多くあるが、今回は事業だけでなく関係する主だった人物の両方に着目し、都市デザイン室に伝わるエピソードなども交えながら論述する。

## 2 田村明×大テーブル主義

田村氏の強力なリーダーシップのもとスタートした企画調整室には1・8m四方の特製製図板が置かれ、都市デザイン、プロジェクト、コントロールの3つの戦略を受け持つ各部署が一堂に会し、企画調整の主な目的でもある総合性の確保のため、情報は共有され、平場の議論が交わされた。「目標会議」と名付けられた毎月曜日のこの会議では、実際に業務を進めている担当や係長が主に発言し、田村氏と直接やりとりをした。ただのテーブルではなく製図板であったのは、その場でエスキースやスケッチを描き、具体的な議論が行えるようにある。作業が深夜に及ぶこ

とも多かつた都市デザイン室では「あの頃は大変で、よく大テーブルの上で寝た」といったような話が語り草となっている。この大テーブルは今でも昔のような横断的・総合的な議論の場として、またその象徴として、都市デザイン室で大切に使われている。

## 3 岩崎駿介×市街地環境設計制度(1973)

当初「都市は、道路や公園などの公共施設だけでなく、ひとつひとつの建築物が集まってできあがっている。そのため、より良い都市環境の実現には、個々の建築物が都市環境への配慮をすることが必要である」という書き出しからスタートしていた「横浜都市街地環境設計制度」。この制度設計は大学で法律と建築の両方を専攻し、民間経験も豊富な田村氏発案の下、コントロールを担当されていた廣瀬良一氏と都市デザインチームの岩崎駿介氏が中心となって行なわれた。道路の貧

執筆

桂 有生

都市整備局都市デザイン室

弱であった横浜の歩行者空間を充実するような公開空地、後には歴史的建造物の保全とも引換えに、高さ制限の緩和とセットで容積率の割増をすすめる「ボーナス」の考え方は、アメリカで都市デザインの実践を経た岩崎氏ならではの発想だったことが当時調整課、後の初代都市デザイン室長、内藤惇之氏へのヒアリングなどからも分かっているが、岩崎氏本人は、都市デザインの取組みが都心部ばかりに集中しているという思いから、市内各地域を想定して制度設計したことを強調している。また、山下公園通りでのペア広場などの実践的試みがこの制度制定以前に行なわれていたという点は興味深い。環境設計制度は都市デザインとコントロールが横断的に取り組まれていたことの好事例であると同時に、今も継続的に良質なパブリックスペースを創出している。

#### 4 都市デザインチーム×くすのき広場(1974)

くすのき広場は市役所に隣接し、緑の軸線にも位置づけられた車道を、地下鉄工事の復旧に合わせて歩行者空間として整備したもので、都市デザインチームが企画、自ら図面を描きながら各局調整を行ない、横断的な各局協力により実現した最初のプロジェクトである。コンセプトは「市庁舎との関係を密にし、他の建築群へと広がるインパクトを持つ、リズム感溢れる歩行者空間」。すなわち、市庁舎の素材や柱割に合わせたレンガとコンクリートの路面パターンデザイン、周辺建築物のカラーコーディネートション、緑の軸線上の照明器具の共通デザイン開発、絵タイ



くすのき広場 (整備前)

ル・サインポールによる都心プロムナード、連続する関内駅南口前車道の歩行空間化(1985)など、道路単体に留まらないデザインを提案し、その後の歩行者空間整備の展開に大きな影響を及ぼす原型となった。国吉氏のインタビューでは都市デザインチームに加え、内藤惇之氏の3人でコンペを行ない、勝利した岩崎案を直接施工会社とのやりとりの中でつくっていったことが論述されている。岩崎氏は都市デザインとは「コミュニケーションを装飾化する」ことであると、「守られてはいるが人の往来が見渡せるスペース」をくすのき広場にも点在させることで「群衆の中の孤独」「孤独から共感」という考えを具現化している。広場よりも駐車場レベルを下げ車が視界に入らないようにするなど、歩行者のためのきめ細かなデザインが随所になされている。

#### 5 国吉直行×馬車道・伊勢佐木・元町(1976)

関内地区は戦災と接收、その間の横浜駅周辺地区の急成長によって相対的に地盤沈下の傾向にあり、全市的な傾向としても路線型の商店街は駅

前の集中型商店街に対して苦戦していた。経済局の商店街活性化モデル事業第一号であった馬車道商店街はくすのき広場の整備や都心プロムナードの成果を見て、商店街を貫く道路そのものの魅力向上を決定、都市デザインチームに協力を求めた。田村氏、岩崎氏を中心に単体の商店街を支援することには否定的だった企画調整局であるが、国吉氏は地元と関わりながらまちづくりを主張、最後は都市デザインの一専門家、という形での協働に踏み切った。具体的な整備は車道を片側走行に狭めて歩道の拡幅、レンガ舗装、街路樹、ストリートファニチュア・広場の設置など。まちづくりの目標は「歴史的建造物の残る地区の特性を活かしながら歩行者が楽しく歩ける街をつくること」であった。馬車道商店街は独自の街づくり協定をつくり、さらに総合的なまちづくりを推進していった。協定の主な内容は1・2階の壁面後退(2・5m以上)、外壁の色彩(茶・モノトーン系)、1・2階の用途は極力物販・飲食とする。特に壁面後退についてはまちとしての合意が得られにくい中、町方・六川英一氏が



馬車道 (整備前)

率先して自らの建物をセットバックすることで合意形成を推進。国吉氏はそういった町方の意向を受け、協定の内容と決めた。その後の運用協力といった形でまちづくりをサポートした。横浜の商店街には商人同士の競争原理が働いており、馬車道の成功を間近に見た伊勢佐木町商店街からも再整備の話が出る。こちらは終日車両乗り入れ規制による完全な歩行空間化である。他にはアーケードの撤去、無電柱化、シンボルゲートの設置、舗装の高質化などを行なっている。元町のまちづくりは1955年の壁面線指定、セットバックによる歩行空間の確保が行われていたが、みなとみらいの開発がよいよ動き出すということでは若手中心のまちづくりが80年代に入り始まった。車道の片

側通行、車道の蛇行化、歩行者優先のレベル設定、シンボルゲート設置、無電柱化など、手法としては先の2つの商店街整備の延長上にあるものではあるが、プロセスが改善されていることが元町の特徴である。整備計画は元町街づくり協議会が主体となって計画し、市に対しては主に制度上の後方支援のみを要請、先の2つの商店街に対しては行なっていたデザイン調整についても「デザイン室はデザインしなくていいです。きちんとやりますから」と言われたと国吉氏は苦笑いするが、3つの商店街整備を経て、町方が成長しプロセスまでもが変化したことは大きな成果だったと語っている。

#### 6 北沢猛×歴史を生かしたまちづくり(1988)

今でもその風潮は残っているが、都市デザインチームには良い意味での緊張関係があり、新しく来た者は何とかして自分の専門性を活かす仕事を考えなくてはならなかった。国吉氏もインタビューで「田村さんや岩崎さんの手のひらからいかにして飛び出すか」を常に考えていたと述べている。1977年入庁の北



『港町・横浜の都市形成史』

沢猛氏は、既に成果を上げ始めていた横浜市の都市デザイン行政に魅力を感じ、横浜へと飛び込んできた個性ある人たちの一人で、間もなく新規事業として歴史を重視したまちづくりを始める。時は飛鳥田市政から細郷市政（1978）へと変わり、岩崎氏（1980）、田村氏（1981）が相次いで横浜市を離れ、企画調整局は解体、という横浜の都市デザイン行政にとって波乱の過渡期にあたる。その時期に北沢氏は都市計画学会との「港町・横浜の都市形成史」（1981）の編纂を皮切りに、後に「歴史を生かしたまちづくり」として都市デザイン行政の大きな柱となる事業をまとめていく。この時期、都市デザイン室では歴史を生かしたまちづくりの基礎となった横浜開港資料館の堀勇良氏との歴史的環境保全調査（1983-84）と、石井幹子氏との歴史

的建造物のライトアップ実験（1986）、エリスマン邸、旧日本火災横浜ビルといった実際に失われつつある歴史的建造物の個別の保全活動と個別のプロジェクトが同時進行で行なわれていた。こうして生まれた「歴史を生かしたまちづくり要綱」（1988）は歴史的建造物をまちづくりの重要な資源として捉え、まちの風景となる部分、すなわち歴史的建造物の外観を保全する際の助成を行える仕組みである。これは今まで各地で行なわれて来た文化財政とは全く異なる思想であり、歴史的建造物の所有者は使い方に合わせて内部の改変が可能、建物の保全活用の巾は大きく広がることとなる。また、他都市から遅れ、歴史を生かしたまちづくりとほぼ同時期に始まった横浜の文化財政とはお互いに補完する運用を行ない、その後みなど多岐の歴史的遺構を残すことが出来たこと、さらには日本全国の自治体が横浜に倣ったことで日本中の多くの歴史的建造物が保全されたことは画期的であった。北沢氏はその後、1997年に横浜市を離れ母校であ



旧第一銀行（曳家中）

る東京大学に移るが、2002年には中田市政の参与として「創造都市政策」を推進。2009年に亡くなられるまで、自身がスタートしたハードとしての歴史的建造物保全による活用を加えることで横浜のまちづくりを更に総合的に推し進めた。

### 7 宮澤好×水と緑のまちづくり（1985）

70年代後半から北沢氏をはじめ都市デザインチームも少しずつ人が増えていく。港北ニュータウンのコンサルタントだった西脇敏夫氏、イギリスで都市デザインを学んだ田口俊夫氏など、田村氏の言葉で「市役所らしからぬ」人々を都市デザインチームは呼び込んでいった。同時期の「都市デザインチームは都心部ばかりやっている」という指摘などを契機に郊外スタディーをスタート、田口氏の大岡川

プロムナードを皮切りに郊外区の魅力づくり事業へと発展させていく。都心部は岩崎氏、国吉氏のシマであり、メソバはその「手のひらから飛び出す」必要があったことの裏返しともいえる。1982年、チームから室となった都市デザイン室に、建築局で学校施設検討を都市デザインチームと行っていた宮澤好氏が移籍、水と緑のまちづくりを開始する。当時、河川の状態は宅地開発による水量の減少、水質汚染、暗渠化、垂直護岸など厳しいもので、横浜市に河川の管理権限がないこともまちづくりからアプローチする際のハードルとなっていた。一方で総合治水、親水という新しい考え方が生まれようとしていた時期である。宮澤氏は、よこはま川を考える会や、まいおか水と緑の会などの市民活動に参加、川掃除や筏遊び、シンポジウムやワークショップなどを行ないながら市民ニーズや他都市の整備事例などを研究、それらを背景として1985年「基本構想1川を座標軸としたまちづくり」をまとめる。郊外にとって河川は都心部の港に匹敵する地域の個性であり、従来の都市軸ではなく川を座標軸としたまちづくりを



和泉川親水公園

構想しようというもので、川の自然、空間、生活、歴史、文化に着目し4つのテーマ…①水辺と一体となったまちづくり、②豊かな都市自然のありまちづくり、③災害に強いまちづくり、④水文化の生まれるまちづくり、を設定している。最初は鶴見川流域ネットワークキングの発足などを背景に、橋の架替えなどの契機を捉えて地区の拠点整備の計画調整を行ない、徐々にその活動を拡げていく。具体的な整備は宮澤氏が関わっただけでなく新横浜公園の多目的遊水池（横浜国際総合競技場）、早瀬川、大岡川、舞岡川、いたち川、和泉川などに及ぶ。宮澤氏は「宮澤流でのびのびやらせてもらった」と言うが、実際には国と歩調を合わせる、財政的な裏付けを用意する、など細やかな調整を行

なっていた。水と緑のまちづくりの中で宮澤氏が発展させたワークショップの手法は後の都市デザイン室・市民まちづくり推進担当設置、現在の地域まちづくり課へと続く一連の動きの始まりでもある。

## 8 都市デザイン「7つの目標」

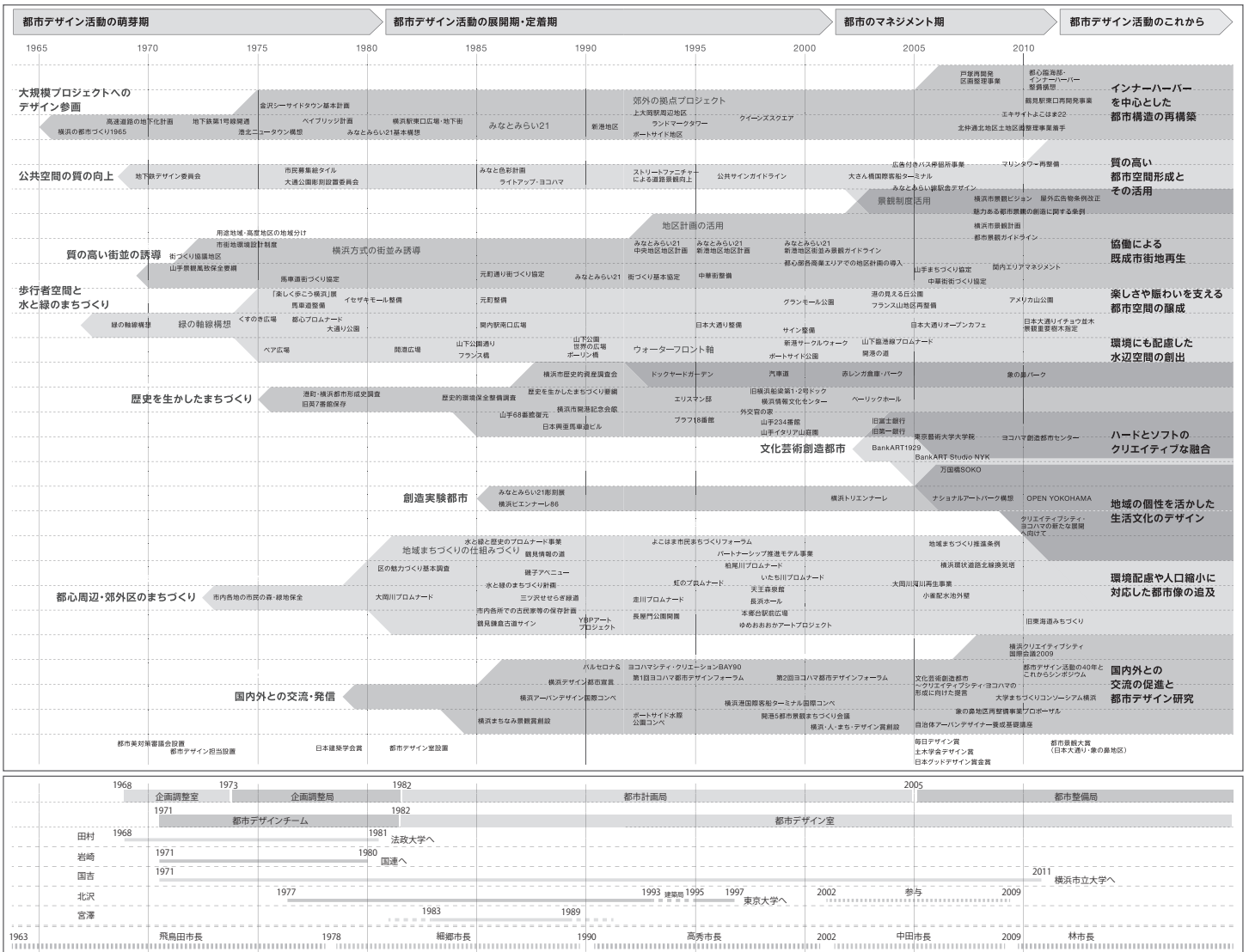
都市デザイン室は、まちづくりの中に美的、人間的価値、各地域の自然的、歴史的、文化的価値などを取り入れる活動を次の7項目で都市デザインの目標としてまとめている。

- (1) 歩行者活動を擁護し、安全で快適な歩行者空間を確保する。
- (2) 地域の地形や植生などの自然的特徴を大切にすること。
- (3) 地域の歴史的、文化的資産を大切にすること。
- (4) オープンスペースや緑を豊かにすること。
- (5) 海、川などの水辺空間を大切にすること。
- (6) 人々がふれあえる場、コミュニティケーションの場を増やす。
- (7) 形態的、視覚的美しさを求める。

これら7つの目標は機能性や経済性などの価値観に加え、楽しさ、潤いなどの人間

にとって重要な価値を最終的には(7)にあるようにつくり出すものや空間の質によって求めよ、という意思を表わしたものである。

冒頭のエピソードで田村氏が譲らなかつたという「デザイン」という言葉には意匠と計画の両方が同時に含まれており、計画を形にするまでの総合的な工夫を意味するが、日本語にそのような言葉はない。企画調整局（調整とは横つなぎのために他部署に積極的に介入して実践的にすることと田村氏は述べている）が無くなる時に「北沢君と（中略）我々都市デザインチームだけは突っ走ろう、という意思確認をしていた」と国吉氏は語っているが、横浜の都市デザイン活動は、デザインという言葉が本来持つ、総合的な質を根本的に追及することから生まれており、今回振り返ったように、その質は多くの個性の集合によって支えられてきた。都市を取り巻く状況が大きく変わりつつあるいま、課題はより総合的に解決していかなくてはならない。各人が個性を発揮し、他部署に積極的に介入しながら都市・横浜をきちんと「デザイン」することが今も求められている。



都市デザイン年表